

Title	アジア経済史から見た中国
Sub Title	China in the framework of economic history of Asia
Author	古田, 和子(Furuta, Kazuko)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2018
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.110, No.4 (2018. 1) ,p.361(1)- 385(25)
JaLC DOI	10.14991/001.20180101-0001
Abstract	<p>伝統中国は社会を崩壊させることなくなぜかくも膨大な人口を扶養しえたのか。本論ではA)それはどのような経済であったのか, B)周辺アジアにどのような影響を与えたのか, の二つの論点を提起した。両者は本来不可分の関係にあり, 問いに応えるためには中国を「中国史」ではなく「アジア経済史の枠組み」で検討することが不可欠であることを, 人口・食糧・小農経済, 山地の過開発と環境問題, 周辺地域への人口移動, 対外開放型経済と貨幣制度, 市場とそれを支える秩序などの検討を通じて示した。</p> <p>How can traditional Chinese economy support a huge population without collapsing society? This article raises two issues : A) identification of the economy type, and B) influences it had on surrounding areas in Asia. In order to respond to the question, it is indispensable that both issues are indivisible. Therefore, it is essential to examine China in the framework of Asia's economic history, not that of Chinese history. We may further understand China by exploring : the population; the food ; its small-scale peasant economy ; over-development, which caused serious environmental problems ; migration of population to surrounding areas in Asia ; an open-door economy and its monetary system ; and the order supporting the market.</p>
Notes	会長講演
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20180101-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アジア経済史から見た中国

古田和子*

China in the Framework of Economic History of Asia

Kazuko Furuta*

Abstract: How can traditional Chinese economy support a huge population without collapsing society? This article raises two issues: A) identification of the economy type, and B) influences it had on surrounding areas in Asia. In order to respond to the question, it is indispensable that both issues are indivisible. Therefore, it is essential to examine China in the framework of Asia's economic history, not that of Chinese history. We may further understand China by exploring: the population; the food; its small-scale peasant economy; over-development, which caused serious environmental problems; migration of population to surrounding areas in Asia; an open-door economy and its monetary system; and the order supporting the market.

Key words: Chinese economy, economic history of Asia, peasant economy, migration of population, development and environment

JEL Classifications: N55, N95, O53

本稿は 2016 年 12 月 22 日に慶應義塾経済学会で行った会長講演を原稿に起こしたものである。

* 慶應義塾大学経済学部
Faculty of Economics, Keio University
kfuruta@econ.keio.ac.jp

はじめに——問いの立て方を相対化する

1800年前後の世界人口は10億人弱、そのうち中国は3.5億人（James Lee 推計⁽¹⁾）を占めた。1820年における中国のGDPは、世界のGDPの35パーセント強を占め第1位である（Maddison Historical GDP Data⁽²⁾）。経済史研究の領域では、従来からなぜ中国の工業化が西欧に比して大きく遅れをとったのかが一般的な問いとしてあった。その問いに対してさまざまな立場から議論が繰り返されてきたことは周知のとおりである。それに対して、本論では問いの立て方自体を相対化してみたい。すなわち、伝統中国は社会を崩壊させることなくなぜかくも膨大な人口を扶養しえたのか、という問いである。そのためにここでは、A) それはどのような経済だったのか？ B) 周辺に位置するアジア諸地域の経済社会にどのような影響を与えたのか？という二つの論点を提起した。A) B) 二つの論点は本来不可分の関係にある。言い換えれば、上記の問いに対応するためには、中国を「中国史」の枠組みで考えることには問題があり、アジア経済史から見た中国を検討することが不可欠であるということである。講演のタイトルを「アジア経済史から見た中国」としたのはこのような意図からである。

なお、本論が対象とする時期は主として18世紀から20世紀初頭（1700年–1910年代）、中国史の時代で言えば清代の中期から末期、そして中華民国の初期に相当する時期である。

図1はMaddison Historical GDP Dataから算出した1820年における世界各国のGDP比率である。中国は35パーセント強で1位、2位はインド17パーセント、3位イギリス（UK）5パーセント強、そしてフランスが5パーセントで続いた。1820年はアヘン戦争が始まる20年前であり、中国は伝統的な農業社会である。一方、イギリスは18世紀末に産業革命がおこり工業化が進みつつあった時代である。

本題に入るにあたって前提となる事項を3点押さえておこう。第1は時代区分である。中国の歴史

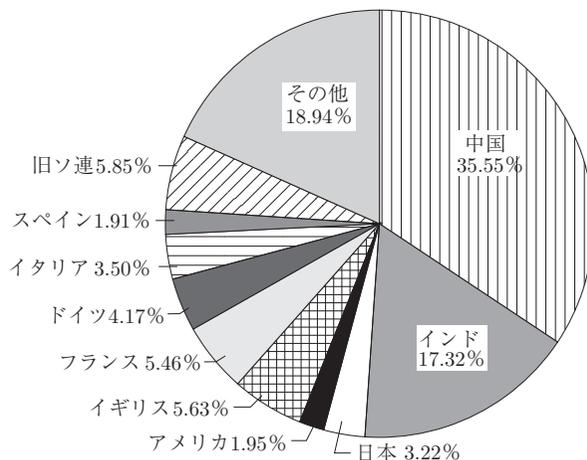
(1) James Z. Lee and Wang Feng (1999), *One Quarter of Humanity: Malthusian Mythology and Chinese Realities 1700–2000*, Cambridge, Mass. and London, England: Harvard University Press.

(2) <http://www.worldeconomics.com/Data/MadisonHistoricalGDP/Madison%20Historical%20GDP%20Data.epf#>

(3) 杉原薫はヨーロッパの工業化を比較史の視点からコメントするなかで、アジアについて同様の問いを提起し、アジアは一人当たり生活水準は低いが、社会を崩壊させずに維持しつつ、同時に膨大な人口を維持・増加する社会的能力を持つことは、産業革命に匹敵する世界史的事件と言えるとしている。杉原薫（1998）、「総括コメント：比較史のなかのヨーロッパの工業化——制度史的接近」『社会経済史学』、第64巻第1号。

(4) Maddison Historical GDP Dataは成長率を仮定することで1820年以降の系列をそれ以前に遡るものであり、データとしては問題を残す。

図1 1820年における世界のGDP比率



資料： <http://www.worldeconomics.com/Data/MadisonHistoricalGDP/Madison%20Historical%20GDP%20Data.efp#>

は数千年にわたって廻れるが、さしあたり本論で重要なのは宋代（960–1279年）以降、元（1271–1368年）、明（1368–1644年）、清（1616–1912年）、中華民国（1912–台湾に移り現在に至る）、中華人民共和国（1949年–）である。

第2は中国の「歴史的市場」について。中国は原則として宋代、すなわち10世紀以降、土地売買、職業選択、地主・小作関係、雇用関係など社会経済の広範な部分が民間の契約で執り行われるという社会であった。⁽⁵⁾ また、人々の移動の自由も存在した。西欧や日本の前近代社会には、土地売買規制が存在し、身分制もあって、社会的分業の世襲化・固定化が見られたのとは大きく異なった。

第3は世界帝国としての中華帝国の基本理念と世界秩序観について。国民国家（nation state）は境界によって規定される国家である。それに対して世界帝国（world empire）は中心によって規定される国家であり、中華帝国は歴史上いくつか存在した世界帝国の一つである。たとえば、私が講演を行った部屋には周囲に壁があり、天井には蛍光灯が並んでいて全体としてきわめて均質な空間であった。しかしこの空間は、実は世界帝国を語るのにふさわしくない。読者には周囲に壁がなく、中央に裸電球が一つ吊り下がっている状態を想起していただきたい。電球の真下は明るく照らされて文明の程度が最も高い「中心」である。電光は、中心から離れるにしたがって弱くなり徐々に暗くなっていくけれども、それを遮る壁がないので原則としては限りなくどこまでも届くものと想定される。この空間が均質でないことは明らかである。これが世界帝国であり、そのうちの一つが中華帝国ということである。

中華帝国には華夷秩序という世界秩序観が存在した。「華」は文明、「夷」は周縁を意味する。何

(5) 岸本美緒（1997）、「『市場史の射程』コメント——中国史から」『社会経済史学』、第63巻第2号、pp.112–115。

をもって「華」とするののかと言えば、一つは象徴体系、すなわちシンボルとしての漢字である。特に書き言葉としての漢字が重要であり、話し言葉については自由であって規定されていない。もう一つは行動準則としての礼である。この二つは特定の地域や民族に還元されることなく、超域的な規範として天下（世界）に普遍的に妥当するものとされた。したがって夷狄（バーバリアン）もこの二つを修得すれば「華」のメンバーになるということがア・プリオリに想定されている。中華帝国の皇帝および支配層の出自は王朝によって異なる。元はモンゴル族であったし、明は漢民族、清は女真族（満洲マンジュ）であったが、これらは上記の規範から言えばすべて中華帝国なのである。中華世界は「華」による「夷」の絶えざる教化によって限りなく広がる文明圏としてイメージされるものであった。

ハーバード大学の中国史の泰斗 J. K. Fairbank はこれを culturalism と表現する。「文ヲ以テ化ス」文化主義であるが、他方でこの文化主義はある意味、限りなく拡張主義的であるとも言えよう。「中華」は本来は超民族的な概念である。現在の中国の政権は「中華民族」という言葉を頻繁に用いるが、そもそも「中華」は民族とは相いれない概念であり、したがって「中華民族」という表現は語義矛盾であることを承知すべきである。

人口の長期変動

次に人口の長期変動を見ておこう。歴史人口学（historical demography）は社会経済史学の根幹となる学問領域の一つであり、慶應義塾大学経済学部にとっては速水融先生（現名誉教授）以来の伝統ある分野である。速水は徳川期日本の家族復元の世界的権威である。家族復元（family reconstruction）は歴史的な人口史料を用いて家族の復元を行う手法である。たとえば北西ヨーロッパでは parish records（教区簿冊）に記載されている個人の洗礼（誕生ではない）・結婚・埋葬日の記録が重要なデータを提供しており、家族復元は北西ヨーロッパを対象として開発された手法である。速水は徳川期の宗門人別改帳を用いて質の高い家族復元作業を行った。宗門人別改帳は徳川幕府によるキリスト教禁止政策遂行のために家族の全成員の記録が残されたという歴史的背景があった。この人別改帳には生年月日・没年月日などのほかにも人の移動、たとえば奉公や下女として農村から町場に出稼ぎに出た記録が記されることもあり、家族復元だけでなくより広い文脈で利用できる史料であった。実は筆者がプリンストン大学留学中、速水先生がサバティカルで半年ほど滞在されたことがあった。慶應での講義から解き放たれ東洋学ライブラリーの古い机に向かって清々しい顔をして仕事をされていたことを覚えている。当時の私は、先生のデータ入力のアルバイトをさせていただきながら、Ph.D. Candidate の資格を得るために専門以外の2分野を含む計3分野にわたる科目試験勉強の最中だったが、同期の仲間とともに先生の運転する車でいろいろな所に遊びに出かけた。その速水先生に「中国を研究するなら、ぜひ歴史人口学をやったら」と言われ、専門としてできるかどうか

かしばらく真剣に考えた時期があった。

中国には族譜という史料が多数存在する。族譜は家族よりも大きな単位である「宗族」の系譜を記した史料である。通常はその地方に移住してきた祖先（始遷祖）から連なる男系の系図であるが、歴史人口学の史料としては三つの問題が存在する。一つは形成物であること、後代の子孫がルーツをたどって宗族の系譜を作り上げることが多いことである。次は社会の上層の記録が残りやすいこと、すなわち族譜を編纂する資力があり、かつそれを作るのが宗族の利益になるという明確な意思が存在する場合に作成される傾向があるということである。第3の問題点は記載における男子中心主義である。ミクロの人口動態を決めるのは女子であるにもかかわらず、女子の姓名が記載されないのは人口学の史料として大きな欠点である。また幼くして没した男子も記載されないことが多かった。結局筆者は歴史人口学を専門にしないと決めたのだが、それはある意味で正解であったと思う。

中国の人口史料には族譜のほかに世帯登録、清朝皇族戸籍があるが、いずれも中国の典型的な人口行動を示す史料とは言えない。利用可能な世帯登録は現在のところ遼寧省（1750-1909年）と日本植民地下台湾（1895-1945年）に限られる。Lee and Campbell（1997）は満洲の漢人八旗の世帯登録制度によって残されていたデータを用いて、1774～1873年の遼寧省道義の社会組織と人口行動を分析したものである。⁽⁶⁾

人口の長期変動（1000-2000年）を示す数値は研究者によってかなりばらつきがある。2000年の中国人口センサスでは12.75億人だが、当時は一人っ子政策下で戸籍のない子供（黒孩子）も多数存在したので正確な数値は把握しにくい（一人っ子政策は2015年12月に廃止が決定された）。歴史的な数値のなかで比較的信頼度が高いとされてきたのは、1400年の0.65-0.80億人⁽⁷⁾、1700年1.5億人、1800年3.0-3.2億人などである。これらに対してJames Leeの推計は1000年1億人、1400年0.9億人、1700年1.6億人、1800年3.5億人としており、従来出されていた数字より多いものになっている。⁽⁸⁾一方、曹樹基による推計は、清代における府レベルのデータを積み上げて各省の人口を推計するオーソドックスな人口史（population history）の成果である。⁽⁹⁾特に19世紀から20世紀初頭における人口の増加、減少、そして再び増加にいたる趨勢（1820年3.83億、1851年4.36億、1880年3.64億、1910年4.36億人）を示したことは高く評価される。さて、本題に戻って長期変動のなかで覚えておいてよい数字は、1700年ごろの1.6億人から1800年ごろの最大3.5億人へ、つまり100

(6) James Z. Lee and Cameron D. Campbell (1997), *Fate and Fortune in Rural China: Social Organization and Population Behavior in Liaoning 1774-1873*, Cambridge and New York: Cambridge University Press.

(7) Ping-ti Ho (1959), *Studies on the Population of China, 1368-1953*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

(8) Lee and Wang (1999), *One Quarter of Humanity*.

(9) 曹樹基 (2001), 『中国人口史 第5巻 清時期』上海: 復旦大学出版社。

年間に2倍以上になっていることである。18世紀は人口急増の時代であった。

清代のマクロの人口動態を押さえたうえで、工業化以前の伝統的農業社会の段階で急激に増大する人口を扶養しえた要因としてどのような要素を考えるべきであろうか。ここでは人口扶養の諸要素として、食糧・農業生産と小農経済のあり方と、外来作物の伝播と開墾・開発・移住を取り上げておきたい。The World Watch Institute の Lester R. Brown は 1994 年に “Who Will Feed China?” という有名な警告文を発表した⁽¹⁰⁾。20 世紀後半における中国の人口急拡大を受けて、だれが中国を養うのかという問いを世界に向けて突き付けた論文であった。中国において食糧の自給が崩れると国際穀物相場は直ちに大きな影響を受ける、言い換えれば中国の国内問題はそのままグローバル・イシューになるということである。それでは歴史的中国において食糧を中心とした農業生産はどのような状況であったのだろうか。

食糧・農業生産と小農経済論 (peasant economy)

中国は早くも宋代に世界最高レベルの技術革新を成し遂げたが⁽¹¹⁾、それ以降は明、清を通じてイノベーションと呼べるような技術革新は見られなかった。当該期の食糧・農業生産は伝統的な農業技術による集約農法によって単位面積当たり収穫量の微増を目指すものであり、灌漑の整備、購入肥料の多投、徹底した多毛作と間作の展開とを特徴とした。

小農社会とは、農業社会において、①自ら土地を所有するか他人の土地を借り入れるかを問わず、②基本的には自己および家族労働力のみをもって、③独立した農業経営を行う小農が支配的であるような社会のことである。宮嶋博史は、世界的に見てある時期以降の東アジアほど小農が圧倒的比重を占めた社会はなかったと言う⁽¹²⁾。小農社会は中国、日本、朝鮮、ベトナム北部（红河デルタ）においてそれぞれ時代は異なるが、人口増と耕地増が併存する時代を経て、耕地増が鎮静化し集約化の必要性が顕著になった段階に入って成立した。小農社会には以下の二点の特徴がある。第1は、中世・近世のヨーロッパに見られたような領主層の大土地所有にもとづいた大規模直営地が存在しなかったこと（広く見れば、政治的支配層の大土地所有にもとづく直営地経営の不在）、第2は、東南アジアのプランテーションなどに見られたような農業労働者層、自ら独立した経営主体たりえない農業

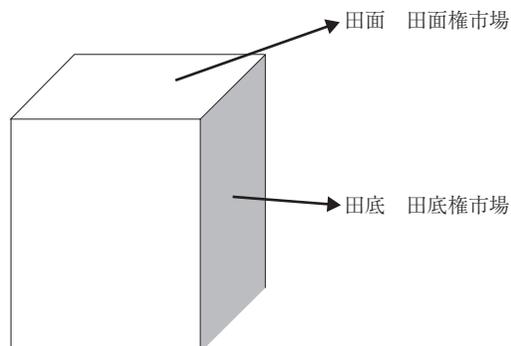
(10) Lester R. Brown (1994), “Who Will Feed China?”, *World Watch*, Vol. 7, No. 5. (September & October 1994). Lester R. Brown (1995), *Who Will Feed China?* New York: W. W. Norton & Company. (今村奈良臣訳 (1995), 『だれが中国を養うのか?』ダイヤモンド社。)

(11) ジョセフ・ニーダム (1974-1981), 『中国の科学と文明』全11巻, 思索社。Joseph Needham (1954-1971), *Science and Civilisation in China*, England: The Syndics of Cambridge University Press.

(12) 宮嶋博史 (1994), 「東アジア小農社会の形成」溝口雄三他編『アジアから考える [6] 長期社会変動』東京大学出版会, pp. 70-71。

(13) 宮嶋, pp. 70-71, 84-86。

図2 「一田両主」の概念図



従事者層がわずかしか存在しない，ということである。小農社会の成立が社会構造や国家支配のあり方に与えた特徴として，政治的支配と土地所有との遊離，民衆の均質化があげられる。たとえば中国の政治的支配層は科挙試験に合格した官僚であるが，科挙に合格して官僚になったとしても土地を与えられるわけではない。彼らは給与生活者であり，土地所有の点では一般農民と質的には何ら変わらない。また，民衆の均質化という点では，大多数の民衆が小規模農地を耕作し，かつ中国は男子均分相続制であったので，一人当たりの耕地面積は2～3世代のうちに確実に細分化した。また重要な点⁽¹⁴⁾は，農家の耕地は狭いだけではなくて，それがさらに小さな地片に分かれて散在したことである。つまり農民はあちらの地片，こちらの地片へと出かけて行って農作業に従事することが常態であった。

華中から華南の稲作地帯では，明代から20世紀初頭にかけて「一田両主」という慣行が存在した。図2の概念図に示したように，地片の田底と田面にそれぞれ田底権と田面権という権利が設定されており，田底権を売買する田底権市場と田面権を売買する田面権市場が存在した。これを「一田両主」，すなわち一つの土地に二人の主がいるという言い方をした。田底権所有者（地主）は納税義務があるので，田底権より田面権の市場の方が活発であった。上述したように，一農家の耕地が小地片に分かれて存在している場合，それらのなかには田底権を持つ地片もあれば田面権だけを持つ地片もありえた。ある地片の田底権を持つ農民が小銭が貯まったので別の地片の田面権だけ買おうかというような判断をしたり，田面権を持つ地片に隣接する地片が売りに出たのでその田面権も買おうかと決断したりすることもある。借財がかさめばある地片の田面権だけを売りに出すこともある。田面権を第三者に小作に出すこともあり，その場合は「一田三主」ということになった。言い換えれば，純然たる地主と純然たる小作の間には地片のそれぞれをめぐって少しずつ異なる権利関係の組み合わせのスペクトラムが存在したということである。

(14) Lloyd E. Eastman (1988), *Family, Fields, and Ancestors: Constancy and Change in China's Social and Economic History, 1550-1949*, Oxford: Oxford University Press. (上田信・深尾葉子訳 (1994), 『中国の社会』平凡社, p.91。)

小農は労働力の提供者であるが、同時に経営の主体でもあった。経営の主体であるという意味において、小農は農奴や農業労働者とは決定的に異なる存在であった。中国における土地生産性は農家が経営の主体であることによって維持されていたと言うこともできる。土地生産性はむしろ顕著に上昇してはいるが、必ずしも下落せず少しずつ緩慢な上昇が見られた。たとえば、間作には手間と根気と的確な判断を必要とする。秋に植えた小麦のうねの間に大豆を植え、小麦を収穫したあとにそのうねに棉花を植え、やがて棉花が成長して日陰を作る直前に大豆を収穫する。小農はその土地を所有しているか借入しているかにかかわらず、作物の組み合わせ、播種と収穫の時期、施肥の仕方などさまざまな判断を自ら下す存在であった。

土地生産性の緩慢な上昇はあったとしても、労働生産性の上昇はありえなかったというのが中国農業における一般的な見解であったなか、清代中期における経済先進地・江南（長江デルタ地帯）を検討した李伯重（Li Bozhong）は世帯当たりの労働生産性は上昇したと指摘した⁽¹⁵⁾。江南では、1) 土地を一年二作の輪作にし、2) 世帯内性別間分業を行い、男性は農耕（食糧生産と工芸作物栽培）、女性は農耕から家内手工業にシフトして生糸や綿織物生産に従事した。結果として、3) 家族のなかで男性一人が約10畝の耕地を耕作することとなった。10畝は67アールであるからその耕地は狭小である。だから中国の農民は貧しいというのが従来の一貫した捉え方であったが、3) の指摘は男性一人が農耕するには10畝は最適規模であってそれ以上は最適ではない、ということを示している。つまり江南では、一世帯当たり（一人当たりではなく）年間（時間当たりでも一日当たりでもない）の労働生産性は上がっていたというのが李伯重によって提起された論点である。その背景には、清代中期の経済先進地の農村における商品作物生産とそれを用いた手工業生産の進展という状況があった。

江南に限らず農村の市場町の数は清代に飛躍的に増大したことが指摘されている⁽¹⁶⁾。農民は日常的に農村市場町に生産物を売りに行く存在であり、その意味で市場経済との親和性は高かった。また、農民の市場参入を規制するような制度的制約もきわめて少なかった。

好況の時代：18世紀

18世紀は人口増大の時代であったが、もう一つの特徴は18世紀半ばが好況の時代であったことである⁽¹⁷⁾。清代における米価のデータは豊富に残されており、それらの数字から米価は1730～40年代に上がり始めたことが明らかになっている。米価の上昇にともなって田価はそれを上回る高騰を

(15) Bozhong Li (1998), *Agricultural Development in Jiangnan, 1620-1850*, London and New York: Macmillan; St. Martin's Press.

(16) Gilbert Rozman (1982), *Population and Marketing Settlements in Ch'ing China*, Cambridge [Cambridgeshire]; New York: Cambridge University Press. 劉石吉 (1978), 「明清時代江南地區の專業市鎮」(上・中・下)『食貨月刊』, 第8巻第6号, 7号, 8号 (1978年9月, 10月, 11月)。

見せ、投機的な「土地ブーム」の様相を呈した。さらに中国の中部・南部では災害もないのに食糧暴動が頻発するようになった。暴動は食糧の移入地帯（東南沿海部—江蘇，浙江，福建，広東）だけではなく，移出地帯（長江中・上流域の湖南や江西などの穀倉地帯）でも発生した。すなわち東南沿海部による米の大量買い付けによって，米産地であるはずの移出地帯で米が不足することへの人々の怒りや不満があったことを示している。食糧不足は供給の減少ではなく需要の拡大によること，つまり作っても作っても足りないという状況が生じていたのである。「粟生金死」とは現物（穀物）を持っている方が貨幣を持っているよりも強い，つまりインフレの到来を表す言葉である。洪亮吉は中国のマルサスと呼ばれる人物であるが，彼はマルサスの人口論が出版される 1798 年よりも前の 1793 年に，人口増による物資不足に警鐘を鳴らした。18 世紀末は人口圧力が徐々に全土に及ぶようになり，帝国のなかの地域間対立もしだいに顕在化するようになっていた。

山地の開墾・開発の時代

18 世紀はまた山地の開墾・開発の時代であった。平地はほぼ開墾し尽くされ，湿地の排水，湖沼の干拓によって耕地を造成する一方，盆地や山地が新たな開発の対象となった。盆地の開発について，上田信による事例研究を紹介しておこう。⁽¹⁸⁾安徽省徽州盆地の祁門県は林業で有名な地方であったが，南宋の時代に確立し元・明を経て清代中葉にいたるまで 600 年間続いてきた林業が 18 世紀半ばのわずか 10 年間で壊滅した。祁門の山間部に外部から入植した人々は，簡単な仮設の小屋に住み谷間の斜面（尾根と尾根とに挟まれたくぼ地）を開削し木を伐採した。人々はトウモロコシを栽培・自給しながら，藍やタバコなどの商品作物を生産した。トウモロコシはサツマイモとともにアメリカ大陸原産の作物であり，山地などの痩せた土地でも栽培可能であった。これらの外来作物は人口を扶養する重要な下支えとなった。傾斜地の土壌が三年ほどで地力が低下すると，入植した人々は別の土地を借りて移動した。一方，風水で言うところの「龍脈」⁽¹⁹⁾が走る稜線や尾根に生育している山林は，宗族の墳墓に陽の「気」（エネルギー）を供給する重要な樹林として保護され伐採が禁止されてきた。ところが 18 世紀半ばにはその風習に背いて，稜線や尾根の林も開発と伐採の対象として

(17) 岸本美緒・宮嶋博史（1998），『世界の歴史 12 明清と李朝の時代』中央公論社，pp. 393-395。岸本美緒（1997），『清代中国の物価と経済変動』研文出版。Yeh-chien Wang（1992），“Secular Trends of Rice Prices in the Yangzi Delta, 1638-1935,” Thomas G. Rawski and Lillian M. Li eds., *Chinese History in Economic Perspective*, Berkeley and Los Angeles, California: University of California Press, pp. 35-68。全漢昇（1972），『中国经济史論叢』上・下，新亞研究所。

(18) 上田信（1997），「山林および宗族と郷約——華中山間部の事例から」木村靖二・上田信編『地域の世界史 10 人と人の地域史』山川出版社。

(19) 「風水」とは，大地を流れている「気」を読み取り，その流れを自らの都合に合わせて修正して，吉凶禍福を操作する環境認識の方法，および環境改変の技術」（上田，同上，p. 93）。

貸し出す者も出てくるようになった。

開発はさらに奥地の山地にも及び、商品作物の栽培や、作業場での製材・木炭製造・製鉄・タバコの加工・製塩などの手工業の展開も見られた。これを中国史では山区経済とよぶ⁽²⁰⁾。これらの手工業は商人の投資によるもので、一つの作業場で3000～5000人規模の労働者を抱える場合もあった。いずれの場合も自給の食糧としてトウモロコシが栽培されていたが、トウモロコシが不作で価格が高騰すると食糧を購入してまで作業場を操業することはせず、資本は引き上げられて作業場は閉鎖された。

過開発と環境：18世紀末～19世紀の変化

このようにして山地の開墾、木材の伐採、土壌の流出によって、18世紀末には洪水が頻繁に起こるようになった。環境史から見ると、中華帝国は18世紀末にはすでに過剰開発と環境破壊に直面していたのである。ちょうどそのころ四川、湖北、陝西の三省が境を接する地帯で嘉慶白蓮教徒の乱（1796-1804年）が勃発した。この地域は外から入ってきた移住民の雑居地帯であり、大規模作業場が閉鎖されると一夜にして数千の人々が生業を失うこととなる。18世紀末に勃発した白蓮教徒の乱はそれらの人々を吸収しつつ勢力を増し、8年を経て収束したときは19世紀に入っていた。

さて、ここに掲げた図3は清代のいつごろの地図であろうか。ヒントは黄河の河口にある。黄河は1855年に流路を大きく変えて、山東半島の北側の渤海に注ぐようになった（図中の破線で示した部分）が、この地図では河口は半島の南側、江蘇省北部にあるので、これはそれ以前のものであることが分かる。黄河の流路変更は、19世紀中国で環境の悪化が進んでいたことを示す一つの事例である。18世紀に進展した山区経済は19世紀前半までに自壊・衰退し、中国南西部では森林の被覆率が18世紀初頭から19世紀半ばの間に半減した。自然災害、飢饉、食糧暴動も頻繁に起こるようになった。高橋孝助は1876～78年に華北5省を襲った大旱魃（丁戊奇荒）とその官と民の両者による救済活動の様を社会史の視点から見事に描いている。一方、Lillian M. Liは華北の飢饉を3世紀⁽²¹⁾にわたって分析した。彼女は直隸省の小麦価格・降雨記録・収穫の程度を示すデータを収集し、18世紀に比し19世紀は人口増、環境悪化、国家介入の低下の全要因が関連したことによって穀物価格の安定性が低下したことを明らかにしている。ただし、洪水・旱魃の年は穀物価格が急騰するのは確かであるが、文献史料で記述されているほどの顕著な急騰ではなかった⁽²²⁾と言う。また Kenneth Pomeranz は黄河と大運河が交差する華北内陸部に焦点をあてて、大運河の機能低下・漕運の廃止、

(20) 傅衣凌（1982）、『明清社会経済史論文集』北京：人民出版社。上田信（1994）、「中国における生態システムと山区経済」溝口雄三他編『アジアから考える6』東京大学出版会。

(21) 高橋孝助（2006）、『飢饉と救済の社会史』青木書店。

(22) Lillian M. Li（2007）, *Fighting Famine in North China: State, Market, and Environmental Decline, 1690s-1990s*, Stanford, California: Stanford University Press.

図3 清代の環境——黄河の流路変更



注：太い破線で示した線は変更後の黄河の流路。

大運河から海運への輸送ルートの変更を背景に、この地域が国家からも見捨てられ、環境的にも厳しい貧困地域が作り出される過程を分析している⁽²³⁾。また近代の災害史は李文海など人民大学の清史研究所のグループを中心に研究が進んでいる⁽²⁴⁾。19世紀後半は中国だけではなくインド、ブラジルその他多くの地域で旱魃が起きており、エル・ニーニョとの関連などグローバルな地域間比較は今後の課題である。ところで食糧暴動の発生は自然災害や飢饉とともに食糧流通や国家の経済政策にも深くかかわる問題である。18世紀から19世紀前半には常平倉を中心とする官による穀物備蓄制度がうまく機能していた。米穀の売買を通じて価格を安定化し、貸出や飢饉のときの賑恤を行うこの政策は、しかしながら19世紀半ばに崩壊し、19世紀末から20世紀初頭には江蘇省・浙江省を中心に食糧暴動が頻発した⁽²⁵⁾。

もう一つの問題は漢民族の入植とそれにとまう先住民との軋轢である。19世紀半ばに広西省から起こり広範な地域を席卷した太平天国の運動(1851-1864年)は、近年の議論で広西移民社会における軋轢に問題の核心の一つがあることが指摘されている⁽²⁶⁾。貴州省では入植した漢人に対する先住の苗族による蜂起もあった⁽²⁷⁾。19世紀は、人口圧力が社会に重くのしかかる時代であった。人々

(23) Kenneth Pomeranz (1993), *The Making of a Hinterland: State, Society, and Economy in Inland North China, 1853-1937*, Berkeley and Los Angeles, California: University of California Press.

(24) 李文海・程献・劉仰東・夏明方(1994), 『中国近代十大災荒』上海: 上海人民出版社。

(25) 堀地明(2011), 『明清食糧騷擾研究』汲古書院。

(26) 菊池秀明(1998), 『広西移民社会と太平天国』(本文編), 風響社。

図4 清代における人口移動の波



資料：Yeh-chien Wang (1973), *Land Taxation in Imperial China, 1750-1911*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, p.85; ロイド・E・イーストマン (1994), 『中国の社会』平凡社, p.23 をもとに筆者作成。

の移動と流動化による社会的なひずみ、多発する戦乱・災害もそのことと深く関連していた。従来の中国史では、1840年にイギリスと清の間に勃発したアヘン戦争を契機に、中国は西欧列強による外からの圧力によって政治・経済・社会全般の衰退期に入ったとされてきたが、19世紀の中国は外からと同時に内から生じた問題にも直面していたのである。

清代人口移動の波

図4は清代の人口移動の波を示したものである。明は半月型の版図であったのに対し、清は18世紀半ばの乾隆帝の時代に最大版図になった（現在の中華人民共和国よりも広い）。清代の移住は人口密度の高い先進地域から大きく西へ、北西へ、東への波があった。最大の波は西、すなわち四川省・雲南省・貴州省・広西省へ向かう移動であった。とりわけ四川省では18世紀第4四半期から19世紀前半の3世代間に3500万の人口増加が報告されており、人口密度の急激な上昇が見られた。第2の波は北西へ、陝西省・甘粛省への移動である。そして第3は東へ向かう波、すなわち海を越えての台湾への移動である。ちなみに台湾は1684年に清の直轄地になっている。

(27) 武内房司 (1982), 「太平天国期の苗族反乱について——貴州東南部苗族地区を中心に」『史潮』, 新12号。

第4は大陸部東南アジアへの移動である。現在のベトナム北部にあたる地域に、送星銀鉞山という銀山があって、18世紀後半の記録によればその鉞山には数万人の中国人労働者がいたという。その記録が残っていたのには理由があった。すなわち1765年、この銀山で二つの中国人労働者集団間で争いが発生し、それぞれの集団を率いる二人の頭目を先頭に武器を持っての械闘かいとうが繰り返された。頭目も中国人、労働者も中国人、闘っているのは中国人同士であり、ベトナムの官憲はその対応と混乱の收拾に苦慮しているさまが記されているのである。労働者は中国側に送り返されたはずであったが、ベトナムに身を隠して帰朝しなかった者もいて、10年後、その銀山で再び中国人同士の械闘(28)が発生したのであった。後に述べるように銀は貨幣素材として当該期の中国になくてはならないものであった。

閑話休題。このあたりは筆者にとっても思い出深い場所である。1980年にランソンというベトナム国境の町に行った。夫が在外研究でハノイに滞在していたので、私も新婚時代をしばらくハノイで暮らした。前年の1979年、中国とベトナムの間で中越紛争が起き、ランソンはその戦場になった場所の一つである。ベトナム人の知人は中国が国境を越えて攻め込んでいかに酷い状況であったのかを見せると言い、頼んでいないのに国境地帯に連れていかれたのだった。国境には川があって対岸の中国側（広西チワン族自治区）は低い山が続き、ベトナム側で少し高い岩山に登るとたしかに中国軍がこういうふうに展開してきたのだという彼の説明が手に取るように分かった。中越紛争は中国とベトナムという社会主義兄弟国がごく普通の国家間戦争を闘ったという意味で、当時の国際政治に衝撃をもって受け取られた紛争である。社会主義建設を先導した兄貴分の中国が国境を越えて攻めてきたことに人々は動揺を隠しきれない様子であった。

1996年ランソンを再訪した。中越の国境でモノが活発に動くようになったので、その様子を見に行く途中、運転手が子供にアイスキャンデーを買ってくれて、「あっ、それは食べないで」と言おうと思ったときにはもう食べていた。結果は私の危惧のとおりで、ホテルを離れるわけにはいかなかった子供とこれにつきあうはめになった夫を残し、私だけ友誼関と呼ばれる国境地帯まで行った。当時は中国製の家電製品がベトナムに入るようになったところで、家電製品を天秤棒で担いでベトナムに持ち込む光景が印象的だった。

本題に戻って、大陸部東南アジアとの関係でもう一つ重要な変化は、18世紀半ばにシヤム湾（現在のタイ）やベトナム南部のメコン河口でジャンク船の一大建造ブームが起こったことである。⁽²⁹⁾ジャ

(28) 鈴木中正 (1975), 「黎朝後期の清との関係 (1682-1804年)」山本達郎編『ベトナム中国関係史——曲氏の抬頭から清仏戦争まで』山川出版社, pp. 430-437.

(29) Nola Cooke and Li Tana eds. (2004), *Water Frontier: Commerce and the Chinese in the Lower Mekong Region, 1750-1880*, Lanham: Rowman & Littlefield.

ンク船は中国の帆船で大型のものは海洋を航行する性能を備えていた。そのジャンク船を国内ではなく海外の東南アジアで建造しようということである。その背景には中国国内の米価高騰と米不足の問題が存在していた。1722年、清朝政府は関税免除を約して東南アジアからの米の輸入奨励策を出した。しかし中国商人は米貿易に消極的であったので、1747年、政府は海外でのジャンク船の建造許可を発令した。すると彼らはシヤム湾やメコン河口で盛んにジャンク船を建造し、それに米を載せて中国に輸入するようになった。18世紀は中国の木材価格も人口増による需要の拡大で高騰した時代である。現地の木材を用いて東南アジアで船を建造すれば、その費用は中国で建造する場合の半額ですんだので、造船から得られる収益で米貿易に必要な経費を賄うことが十分に可能になったからであった。もちろん造船技術の移転と労働力移動にも相応の費用がかかるから、中国商人によるジャンク船建造のアウトソーシングは、中国と東南アジアのそれぞれの地点における米と木材の相対価格を勘案したうえでの決断であった。18世紀中国の米価／木材価格の高騰はアジア域内交易の活性化を促す要因となっていたのである。

第5は東南アジア島嶼部への中国からの人の移動である。マレー半島、ジャワ、バンカ島における錫鉱山への開発投資⁽³⁰⁾や、ジャワ島バンテンでの糖業、スマトラ島ランブンでの胡椒交易⁽³¹⁾など多様な分野で中国人の関与が盛んになった時代である。

第6に、北へ向かっては山東半島から満洲（中国東北地方）への人の移動が顕著になった。この移動は頻繁な往復運動の形をとっており、兩岸に跨った血縁組織が形成されたことが荒武達朗の研究⁽³²⁾で明らかになっている。

19世紀後半になると新たな形態による人の移動が出現した。第7はそのうちの一つ、中国華南の福建・広東・海南省などから東南アジアへの移動である。東南アジアではヨーロッパ各国による植民地開発が進展し、それにとまって生じたプル要因による中国人の移動が増大した⁽³³⁾。商人として貿易に従事する者もいたが、多くは錫鉱山やプランテーションでの労働に従事する人々であった。東南アジアへ出て行った中国人の帰国率は80%であったという数字は、その移動が移民ではなくアジア域内の労働力移動であったことを示している。

第8は、19世紀後半からのもう一つの新たな人の動きとしては、浙江・江蘇・福建・広東省から日本や朝鮮の開港場へ向けての商人の進出がある。周知のように徳川期の日本と清の間には国交はなく、長崎、あるいは琉球－薩摩経由による通商だけの関係であったが、19世紀半ばに日本が開国

(30) 東條哲郎（2008）、「19世紀後半マレー半島ペラにおける華人錫鉱業——労働者雇用方法の変化と失踪問題を中心に」『史学雑誌』、第117編第4号。

(31) 太田淳（2014）、『近世東南アジア世界の変容——グローバル経済とジャワ島地域社会』名古屋大学出版会。

(32) 荒武達朗（2008）、『近代満洲の開発と移民——渤海を渡った人びと』汲古書院。

(33) 杉原薫（1996）、『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房。

し欧米と通商条約を結んで開港場が設置されると、開港場には欧米商人を上回る数の中国商人が来航し活発な経済活動を展開した。中国商人は19世紀後半から20世紀初期における東アジア域内交易の主要な担い手となった。

工業品としての綿製品は19世紀後半におけるイギリスの主力輸出品であり、東アジア各国でも輸入の太宗を占める商品であったが、その多くはいったん上海に輸入されたあと、上海市場で中国商人が買い付け、彼らの流通機構によって中国内地だけでなく日本や朝鮮各地にも再輸出されていた⁽³⁴⁾。当時、イギリスから日本の開港場に派遣されていた領事は、イギリス製綿布は日本市場で大いに売れているがその貿易で儲けているのは中国商人であって、欧米の商社はこれに太刀打ちできないという趣旨の報告を本国に書き送っている。当該期の東シナ海は中国商人主導による地域ネットワークが形成され、それがうまく機能していた時代であった。それが変質してくるのは日本による大陸進出が目指されるようになった20世紀への転換期以降である⁽³⁵⁾。

中国の交易は、国境を画して内と外との貿易というよりも、地域間の交易が北東アジアから東南アジアまで少しずつ重なりながら連鎖する状態と捉えた方が適切である。たとえば、中国内地間もさまざまな銀の間の為替関係で結ばれており、その意味では中国の内と外の違いは商人にとって本質的な差ではなかった。こうして中国商人の経済活動は為替や利潤のよりよい所を求めて容易に国境を越えて延びていくのである⁽³⁶⁾。それでは「さまざまな銀の間の為替関係」とはどのようなものであったのか。次節では中国の貨幣制度について考えてみよう。

中国の貨幣制度をどう考えるか

中国では清代から中華民国初期にかけて多様な貨幣が流通していた。これを雑種幣制という。基本となる貨幣は銅銭と銀で、ほかに紙幣（一種の手形）があった。銅銭は日常の小額取引や一定の地域内での取引に用いられ、政府が鑄造する計数貨幣であった。それに対して、銀は納税手段のほかに、主として高額取引に用いられ帝国内の遠隔地交易や貿易の決済手段である。銀（銀両）は民間の両替商などが鑄造する秤量貨幣である（銀両の「両」は重さの単位で1両=37g）。銀両にはいろいろな形態のものが存在した。図5はその一種で馬蹄銀と称され広く流通していた。民間の両替商が

(34) *The North China Herald*, 各号。Commercial Report on Hiogo, 1874 など (British Parliamentary Papers, Japan, Embassy and Consular Commercial Reports.)。古田和子 (2000), 『上海ネットワークと近代東アジア』東京大学出版会。古田和子 (2009), 『上海ネットワークと近代東亜——19世紀後半東亜的貿易と交流』北京：中国社会科学出版社。

(35) 古田和子 (2005), 「跨国境領域的経済秩序——上海経済網と黄海交易圏」中国社会科学院近代史研究所編『近代中国与世界』第2巻, 北京：社会科学文献出版社, pp. 492-508。古田和子 (1999), 「境域の経済秩序」『岩波講座世界歴史 23 アジアとヨーロッパ 1900年代-20年代』岩波書店。

(36) 古田和子 (2000), 『上海ネットワークと近代東アジア』。

図5 銀両の一種 馬蹄銀

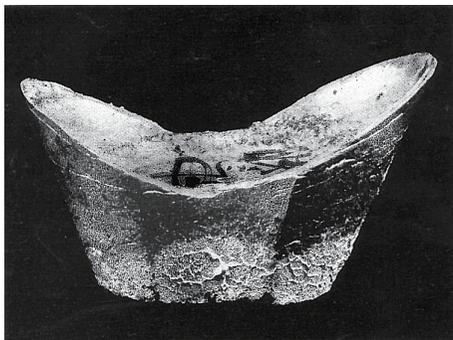


図6 洋銀貨の一種 メキシコ銀貨



資料：図5、図6ともに、支那経済研究会（三井銀行上海支店内）（1928）、『上海ノ通貨』（支那経済研究、第6編）。

馬蹄を逆さにしたこの形に鑄造し、その店名——たとえば「同源銀爐」という店名——と重量・品位を刻印すると通貨になるのである。

銀両に対して、洋銀とは外から入ってきた銀貨のことであり、スペイン銀貨（ピアストル銀貨やカルロス銀貨）とメキシコ銀貨とがあった。スペイン銀貨は地域によって差はあるが18世紀末までには広く流通していたことが知られる。中国側はこの銀貨を銀塊として取り入れるのであるが、質も一定で品位も高くバラツキがないので鑄潰して銀両とする必要のないことに気づきそのままの形で流通するようになった。特にカルロス銀貨やピアストル銀貨などのスペイン銀貨はその品位の高さからしだいに退蔵されてプレミアムが付くようになっていた。図6のメキシコ銀貨は1820年代にメキシコが独立して以降鑄造された銀貨であり、1850年代から1910年代まで中国を中心に東アジアで広範に流通した。

銀と銅銭という二重構造はなぜ必要だったのか。不思議なことに、清朝政府は銀の流通に対しては責任を持たない代わりに介入もしないというスタンスをとった。その背景には帝国内の銀がすでに14世紀ごろから枯渇し始めていたという事情があった。政府にとっては、銀貨を鑄造することよりも国際的な銀の流れを地金のままスムーズに帝国内に取り込むことこそ最重要課題であった。しかしながら、銀を帝国の外に依存することは、地方市場にとっては大きな不安定要因となりうる。したがって政府による銅銭鑄造は地方における貨幣量を安定させるという重要な意味を持っていたのである。⁽³⁷⁾

いずれにしても帝国外から大量の銀を取り込むという意味で、清代の経済はその基底部分において対外開放型システムであったと言ってもよい。ちなみに世界の銀流通の相当部分がさまざまな経路⁽³⁸⁾

(37) 岸本美緒（1995）、「清朝とユーラシア」歴史学研究会編『講座世界史2 近代世界への道』東京大学出版会、p.34。

(38) 岸本美緒（2013）、「明末清初の市場構造——モデルと実態」古田和子編著『中国の市場秩序』慶應義塾大学出版会。

を通過して最終的に中華帝国に流れ込む構造は長く続いた。16世紀には1530年代から日本銀の流入が顕著になり、やや遅れてアメリカ大陸の銀が流入しはじめた。17世紀第3四半期の海禁時には銀の流入量は減少し、その後回復して18世紀には銀の流入は増大した。19世紀第2四半期は世界的な銀クライシス（銀飢饉）という要因もあって銀の流出が観察され、後半になって再び流入へと変わった。ついでに銅に関しても、帝国内の供給量は十分ではなく、17世紀末以降、長崎から輸入する日本銅は清朝の銅銭鑄造に欠かせないものになった⁽⁴⁰⁾。

中国の貨幣制度を「雑種幣制」と言う場合、貨幣が統一されず近代的な制度が未成熟な遅れた幣制という意味合いがあるが、見方を変えて、さまざまな貨幣の間にさまざまな為替相場が建つ状況を「一連の為替相場群」と捉えればそれほど不可解なわけではない。たとえば、銀と金、銅銭と銀、銀と銀⁽⁴¹⁾（そのなかには、銀両と洋銀貨、上海両と各地の両など）の間の為替がそれぞれ変動しており、商人にとってどこを何を取引するかによってどの為替に注目しなければならないかが決まるということである。商人に限らず生産物を市場で売る農民にとっても、日々変動する複数の為替相場は彼らの経済生活に重要な意味を持っていた。筆者が中国の歴史的市場を「情報」の観点から分析する必要性を指摘する理由の一つはこの点にある⁽⁴²⁾。

銀と銅銭の間には銀1両＝銅銭1000文という公定相場が一応は存在したが、相場を決めるのは市場であって、17世紀半ばから20世紀初頭をとおしてその比価は大きく変動した⁽⁴³⁾。図7は19世紀上海における銀両と洋銀貨の為替相場のデータ⁽⁴⁴⁾から作成したグラフである。この相場がなぜ重要なのかと言うと、たとえば輸出品の生糸の買い付けには洋銀貨（メキシコ銀貨）を必要とした。生糸は長江デルタの農村地帯で生産され、集散地の市場町では洋銀貨でなければ生糸を売ってもらえない。そこで毎年6月初頭に新しい生糸が市場に出てくる直前、上海では洋銀貨をめぐって激しい争奪戦が繰り広げられた。その結果、洋銀貨1元を銀両で示した為替相場（これを「洋厘」という）は季節的に高騰することになるのである。

(39) Man-Houng Lin (2006), *China Upside Down: Currency, Society, and Ideologies, 1808–1856*, Cambridge, Mass. and London: The Harvard University Asia Center.

(40) 杉山伸也 (2012), 『日本経済史 近世—現代』岩波書店, pp. 45–50, 58–59, 102。古田和子 (2016), 「中国と日本の経済交流——後期倭寇から日清戦争まで (16–19世紀)」土田哲夫編『近現代東アジアと日本——交流・相剋・共同体』中央大学出版部。彭浩 (2015), 『近世日清通商関係史』東京大学出版会。

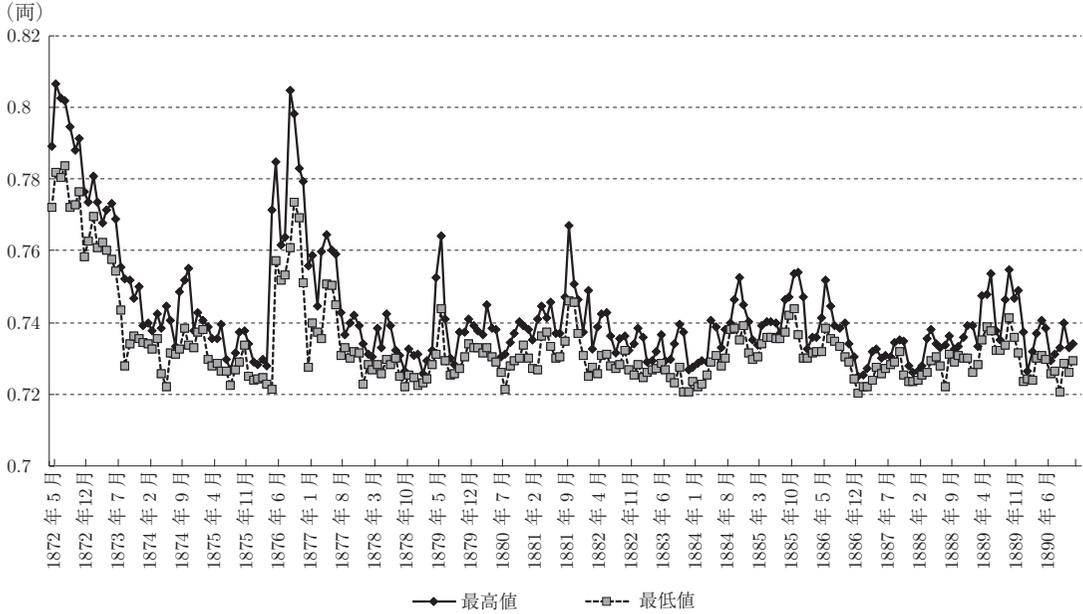
(41) 濱下武志 (1985), 「近代アジア貿易圏における銀流通」『社会経済史学』第51巻第1号。濱下武志 (1989), 『中国近代経済史研究』汲古書院, pp. 412–413。

(42) 古田和子 (2003), 「経済史における情報と制度——中国商人と情報」『社会経済史学』, 第69巻第4号, pp. 11–27。古田和子 (2008), 「中華帝国の経済と情報」水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』山川出版社。古田和子 (2013), 「近代中国における市場秩序と情報の非対称性——19世紀末～20世紀初頭」古田和子編著『中国の市場秩序』慶應義塾大学出版会。

(43) Man-Houng Lin (2006), *China Upside Down*, p. 3.

(44) 中国人民銀行上海市分行編 (1960), 『上海錢莊史料』上海：上海人民出版社。

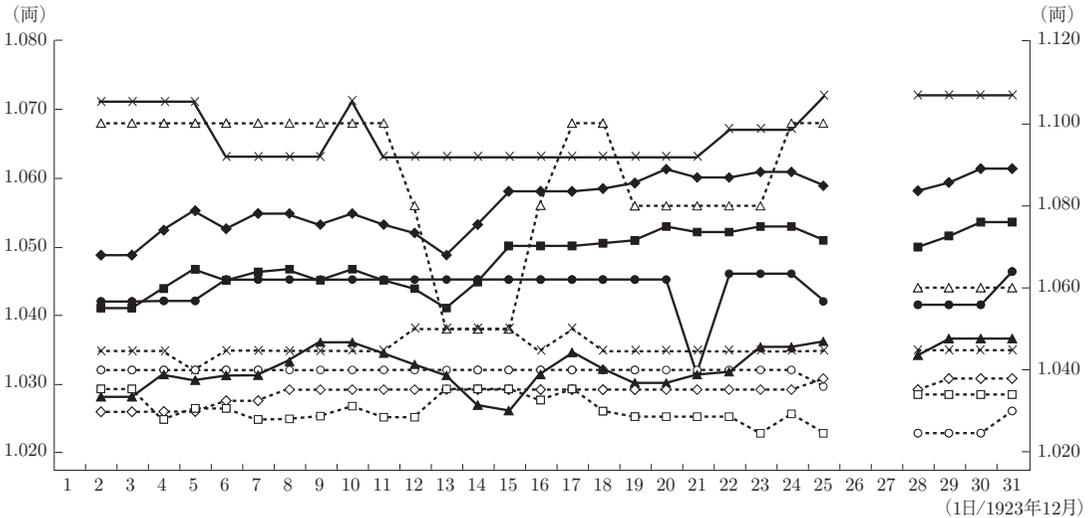
図7 銀両と洋銀貨の相場：上海の洋厘



資料：「洋厘按月最高最低及平均行市統計表」中国人民銀行上海市分行編（1960），『上海錢莊史料』上海：上海人民出版社，pp.610-615。

610-615

図8 銀と銀の為替レート：上海両と各地の両



左軸：■ 北京(公法) ◆ 天津(行化) ● 濟南(濟平) ▲ 漢口(洋例) × 青島(膠足)
 右軸：--□-- 煙台(煙估) --◇-- 宜昌(宜平) --○-- 重慶(九七平銀) --△-- 成都(九七平銀) --*-- 萬縣(九七平銀)

資料：『申報』1923年12月1日～12月31日。

古田和子 (2013), 「近代中国における市場秩序と情報の非対称性」古田和子編著『中国の市場秩序』慶應義塾大学出版会，pp.158-159。

図9 地図



図8は銀と銀の為替レートの変動を示したものである。ここでは上海の銀両と各地の銀両との日ごとの変動をグラフにしている。⁽⁴⁵⁾地図(図9)には当該期に上海と強い経済関係にあった場所がプロットされており、グラフ中で上海とのレートが示されている都市もそのなかに見て取ることができる。

19世紀末から20世紀初頭の上海では、南市と北市の2カ所で大規模な金融業者(錢莊)が集まって、毎日2回(7時から10時の早市/12時~15時の午市)相場を決めた。有力錢莊の同業公会(上海県城内、城隍廟の内園(豫園)に置かれた)の創設は18世紀(1776年)に遡るが、19世紀末には二つに分かれ、北市にも錢業公会が瀟洒な会合所を設けた。⁽⁴⁶⁾上海の南京東路と北京東路の間は個別の錢莊が軒を連ねる錢莊街として有名なところであった。こうして、為替差益を最大化し差損を回避して、同時に為替の出合を求めると、金融の決済は自ずと上海に集中した。債権を留め置くのに最も適した場は上海ということになるのである。⁽⁴⁷⁾

(45) 『申報』1923年12月1日-12月31日。古田和子(2013),「近代中国における市場秩序と情報の非対称性」, pp.158-159。

(46) 李斌(2000),『上海的寧波人』上海:上海人民出版社。上海市档案馆編,史梅定主編(1996),『追憶 近代上海圖史』上海:上海古籍出版社, pp.174-175。斯波義信(2002),『中国都市史』東京大学出版会。宮田道昭(2012),『上海歴史探訪——近代上海の交遊録と都市社会』東方書店,第2章。古田和子(近刊),「交易と決済,市場と国家——18~20世紀初頭の上海」古田和子編『都市から学ぶアジア経済史』慶應義塾大学出版会。

(47) 古田和子(2000),『上海ネットワークと近代東アジア』, p.187。

中国の「歴史的市場」と市場秩序

最後に、中国の「歴史的市場」と市場秩序について考えておきたい。冒頭で触れたように、中国は原則として10世紀以降、土地売買、職業選択、地主・小作関係、雇用関係など経済の広範な部分が民間の契約で執り行われる社会であり、人々の移動の自由も存在した。中国経済は歴史的にきわめて早い段階から市場としての性格を備えていたにもかかわらず、一方では国家・政府や共同体規制などによる秩序維持は相対的に弱く、仲介の連鎖や私人的な保証が意味を持つ私的な秩序維持の比重が高い社会であった。Douglass Northは西欧世界が勃興したのは領域国家によって公的制度が整備され、それが第一次的な取引費用の低減に寄与したからだと言っているが⁽⁴⁸⁾、中華帝国にはそれがなかった。それらを欠いたなかで、きわめて競争的・不安定な市場がなぜ社会的に維持されていたのか。中国の市場秩序を議論する醍醐味はここにあると言ってよい。そのような経済の秩序はどのようなものなのかを分析することは経済史の課題であるが、同時に、市場とは何かということを考えてきた経済学にとっても根源的な意味を持つ問いである。

一般に市場を支える秩序には、①市場の外から規制する集権的な秩序形成と、②市場のなかにおいて市場に影響を与えその働き方を規制する分権的な秩序形成、とがある。②の場合、分権的であるにもかかわらずそこに自ずと秩序が形成されるのは、市場での競争の仕方、危険回避の仕方、あるいは限定的かつ不完備な情報しか持たない状況下で市場に参加することの不安を和らげるための用意の仕方などが、人々にある程度予測され共有されているからである⁽⁴⁹⁾。このような共有予測（shared beliefs⁽⁵⁰⁾）は、個々の人々が経済活動を行うときになぜか拘束されるものであり、外からの強制ではないという意味で内生的な秩序形成である。清代の市場秩序はまさにそのようなものとしてあり、比較的自由的な競争が外からの規制ではなくて、内生的に自ずと形づくられる秩序によって維持され規定されるところに特徴があった。自ずと形づくられる秩序はその社会が歩んできた経路に依存的であり、頑強（robust）でなかなか変わりにくい。

清代の土地市場における民間秩序慣行はその一つの例である。寺田浩明は管業来歴慣行を、多数の家々がその生存と生業確保をめぐる激しい競争を繰り広げている状態——寺田はそれを「押し合いへし合い」の状態と表現する——のなかで、その都度探られる最適な均衡点として存在してい

(48) Douglass C. North (1981), *Structure and Change in Economic History*, New York: Norton.
John R. Hicks (1969), *A Theory of Economic History*, Oxford, London, New York: Oxford University Press.

(49) 古田和子 (2013), 「序論 中国の市場と市場秩序」古田和子編著『中国の市場秩序』, pp. 7-8.

(50) Masahiko Aoki (2001), *Towards a Comparative Institutional Analysis*, Cambridge, Mass.: The MIT Press, p. 10.

たとしている。⁽⁵¹⁾すなわち、清代中国には土地そのものに対する排他的所有権概念はなく、土地の上に成立するさまざまな収益行為が契約文書を通じて売買されていた。したがって、「土地を所有している」とは、ある土地を自由に経営できる地位（「管業」）を、前経営者から正当に引き継いだ「來歴」という形で社会に対して示すことができる状態、⁽⁵²⁾ということになる。

このように説明すると中国史における経済法整備の遅れが指摘され、それは現代にも通底する特殊中国的問題であるかのように受け取られるかもしれない。しかしながら歴史の経路はそれほど単純ではない。青木敦は南宋の法が、土地の市場取引、特に不動産の抵当に関して「微に入り細をうがった取引法」を備えていたことを示し、その体系は明、清と時代が下るにつれて簡素化したことを実証している。⁽⁵³⁾現実が法律の先へ先へと進んでいく状況が出てくる様は、中国における法体系の整備・進展の歴史が西欧におけるそれとは真逆の方向を辿っているかのごとくであり、この点は中国と西欧の法と経済の歴史を比較するとき念頭に置いておかねばならない点の一つである。

通貨の信認についても同様な議論ができる。通常、国家が通貨を発行すればそれで信認が与えられるわけだが、清代には商人が発行する紙幣（銭票とか銀票）が自ずと信認されて流通する自己組織的な秩序があった。⁽⁵⁴⁾信認が得られない通貨は市場で割り引かれあるいは拒否されるということである。

結論

本論では、中国が社会を崩壊させることなく膨大な人口を扶養してきたのはなぜかという問いに対して、A) それはどのような経済であったのか、B) 周辺のアジア諸地域にどのような影響を与えてきたのか、という二つの論点を提示して18世紀から20世紀初頭の中国経済のあり方を検討してきた。A) B) は本来不可分な関係にあり、問いに応えるためには中国を中国史ではなくアジア経済史の枠組みで検討することが不可欠である。

論点 A) については以下のようにまとめられる。中国の「歴史的市場」は人々の市場への参加志向の高さ、諸通貨間の為替相場の変動、開放型の経済体系などの特徴を備えていた。言い換えれば、私的・人的保証を代表する存在として捉えられてきた仲介は、情報の非対称性を低減する機能を持っており、中国における経済過程に占める仲介の比重の高さは、人々の市場参加志向の高さと表裏の

(51) 寺田浩明 (1997), 「権利と冤抑——清代聴訟世界の全体像」『法学』(東北大学) 第 61 巻第 5 号, pp. 66-67。

(52) 同上, p. 10。寺田浩明 (1983), 「田面田底慣行の法的性格」『東洋文化研究所紀要』第 93 冊, pp. 33-131。

(53) 青木敦 (2013), 「宋代抵当法の推移と『農田敷』——要素市場における司法と慣習」古田和子編著『中国の市場秩序』慶應義塾大学出版会。

(54) 黒田明伸 (1994), 『中華帝国の構造と世界経済』名古屋大学出版会, pp. 324-325。

関係にあったとすることができる。⁽⁵⁵⁾

論点 B) について。中国の存在は周辺アジアの社会経済に大きな影響を与え、技術移転、交易、投資、情報の交換など両者の間には緊密な相互依存関係が生み出された。同時に、資源収奪、人の移動・流動性による現地社会との摩擦と軋轢、労働力移動にともなう周辺アジアから中国への送金問題など、関係が深まるにつれて生じるさまざまなフリクションも存在した。すなわち、繁栄の時代の中華帝国も、周辺地域との関係なしには存立しえなかったとすることができよう。

以上の歴史分析は現代に対してどのようなインプリケーションを持つのだろうか。市場と政府のバランスをどう保つかは現代中国が直面する課題である。歴史のなかの中国では「歴史的市場」が持つ強さに比して政府が整備すべき経済秩序の弱さが目立った。社会主義経済の建設期に一時「市場」を否定した中国は、1978年の改革開放後、政府と市場の関係を新たに構築しその成果は現在にいたる工業化に大いに寄与した。けれども現在の中国において「政府」の定義は自明ではない。人々の市場参加志向は依然として高くかつ旺盛であるが、経済の基底部分は清代に見られたような開放型経済とは言えない。中国の政府は現代の「市場」とどう向き合うのだろうか。中央政府と地方政府との利害は必ずしも一致していないし、企業と党との関係も企業内部の党組織による経営への介入問題が見え隠れするなど、今後の中国が市場と政府のバランスをどのようにして保っていくのかは不透明である。

中国と周辺アジアとの関係は東シナ海、南シナ海、インド洋をめぐって諸問題が浮上しつつある。とりわけ中国経済の東南アジアへの南進は規模において過去最大であるがゆえに、その「質」が問われる時代に入った。歴史を振り返るとき、繁栄の時代の「現代中国」もまた周辺諸地域との関係なしに存立しえないことをあらためて銘記すべきである。

謝辞

最後に慶應義塾の経済学への感謝を込めて一言付け加えておきたい。慶應義塾大学経済学部は1997年に「アジア経済史」という科目をはじめて設置し、私は同年に科目担当者として着任した。その時点で日本の大学の経済学部で「アジア経済史」（「アジア経済論」ではなく経済史としての「アジア経済史」）が置かれていたのは、大阪大学や横浜国立大学などごく少数だった。東京大学経済学部は2014年になって初めてこの科目を開設した。世界人口の過半を占めるアジアの人々がどのように暮らしてきたのか、その社会と経済の歴史を分析することは世界全体の社会経済史像を再考する契機として重要な意味を持つ。アジア経済史は今後の世界を考える際に避けて通ることができない視座のいくつかを提供する学問領域でもある。その領域の必要性を認め早期に科目の設置を決断したことは、慶應経済学の一つの見識であったと思う。

(55) 古田和子(2004)、「中国における市場・仲介・情報」三浦徹・岸本美緒・関本照夫編『比較史のアジア——所有・契約・市場・公正』東京大学出版会。

和文参考文献

- 青木敦 (2013), 「宋代抵当法の推移と『農田敕』——要素市場における司法と慣習」古田和子編著『中国の市場秩序』慶應義塾大学出版会。[Aoki, Atusi, 2013, “Sōdai Teitōhō no Suii to ‘Nongtianchi’: Yōso Shijō ni okeru Shihō to Kanshū”, Furuta, Kazuko (ed.), *Chūgoku no Shijō Chitsujo*, Keiō Gizyuku Daigaku Shuppankai. (in Japanese)]
- 荒武達朗 (2008), 『近代満洲の開発と移民——渤海を渡った人びと』汲古書院。[Aratake, Taturō, 2008, *Kindai Manshū no Kaihatsu to Imin: Bokkai o Watatta Hitobito*, Kyūko Shoin. (in Japanese)]
- 上田信 (1997), 「山林および宗族と郷約——華中山間部の事例から」木村靖二・上田信編『地域の世界史 10 人と人の地域史』山川出版社。[Ueda, Makoto, 1997, “Sanrin oyobi Sōzoku to Kyōyaku: Kachū Sankanbu no Zirei kara”, Kimura, Yasuzi and Makoto Ueda, *Chūiki no Sekaishi 10 Hito to Hito no Chūikisi*, Yamakawa Shuppansha. (in Japanese)]
- 上田信 (1994), 「中国における生態システムと山区経済」溝口雄三他編『アジアから考える 6』東京大学出版会。[Ueda, Makoto, 1994, “Chūgoku ni okeru Seitai System to Sanku Keizai”, Mizoguchi, Yūzō et al. (eds.), *Azia kara Kangaeru 6, Tokyo Daigaku Shuppankai*. (in Japanese)]
- 太田淳 (2014), 『近世東南アジア世界の変容: グローバル経済とジャワ島地域社会』名古屋大学出版会。[Ōta, Atushi, 2014, *Kinsei Tōnan Azia Sekai no Henyō: Global Keizai to Javatō Chūiki Shakai*, Nagoya Daigaku Shuppankai. (in Japanese)]
- 菊池秀明 (1998), 『広西移民社会と太平天国』(本文編), 風響社。[Kikuchi, Hideaki, 1998, *Kōsei Imin Shakai to Taihei Tengoku* (Honbun Hen), Hūkyōsha. (in Japanese)]
- 岸本美緒 (2013), 「明末清初の市場構造——モデルと実態」古田和子編著『中国の市場秩序』慶應義塾大学出版会。[Kisimoto, Mio, 2013, “Minmatu Shinsho no Shijō Kōzō: Model to Zittai”, Furuta, Kazuko (ed.), *Chūgoku no Shijō Chitsujo*, Keiō Gizyuku Daigaku Shuppankai. (in Japanese)]
- 岸本美緒 (1997), 「『市場史の射程』コメント——中国史から」『社会経済史学』, 第 63 巻第 2 号。[Kisimoto, Mio, 1997, “‘Shijōshi no Shatei’ Comment: Chūgokushi kara”, *Shakai Keizaishigaku*, vol. 63, no. 2. (in Japanese)]
- 岸本美緒 (1997), 『清代中国の物価と経済変動』研文出版。[Kisimoto, Mio, 1997, *Shindai Chūgoku no Bukka to Keizai Hendō*, Kenbunshuppan. (in Japanese)]
- 岸本美緒 (1995), 「清朝とユーラシア」歴史学研究会編『講座世界史 2 近代世界への道』東京大学出版会, [Kisimoto, Mio, 1995, “Shinchō to Yūrashia”, *Rekishigaku Kenkyūkai Hen, Kōza Sekaishi 2 Kindai Sekai heno Michi*, Tōkyō Daigaku Shuppankai. (in Japanese)]
- 岸本美緒・宮嶋博史 (1998), 『世界の歴史 12 明清と李朝の時代』中央公論社。[Kisimoto, Mio and Hiroshi Miyazima, 1998, *Sekai no Rekishi 12 Minshin to Richō no zidai*, Chūōkōronsha. (in Japanese)]
- 黒田明伸 (1994), 『中華帝国の構造と世界経済』名古屋大学出版会。[Kuroda, Akinobu, 1994, *Chūka Teikoku no Kōzō to Sekai Keizai*, Nagoya Daigaku Shuppankai. (in Japanese)]
- 斯波義信 (2002), 『中国都市史』東京大学出版会。[Siba Yosinobu, 2002, *Chūgoku Toshishi*, Tōkyō Daigaku Shuppankai. (in Japanese)]
- 杉原薫 (1998 年), 「総括コメント: 比較史のなかのヨーロッパの工業化——制度史的接近」『社会経済史学』, 第 64 巻第 1 号。[Sugihara, Kaoru, 1998, “Sōkatsu Comment: Hikakushi no nakano Europe no Kōgyōka: Seidoshiteki Sekkin”, *Shakai Keizaishigaku*, vol. 64, no. 1. (in Japanese)]
- 杉原薫 (1996), 『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房。[Sugihara, Kaoru, 1996, *Azia Kan Bōeki no Keisei to Kōzō*, Minerva Shobō. (in Japanese)]
- 杉山伸也 (2012), 『日本経済史 近世—現代』岩波書店。[Sugiyama, S., 2012, *Nihon Keizaisi: Kinsei – Gendai*, Iwanami Shoten. (in Japanese)]
- 鈴木中正 (1975), 「黎明後期の清との関係 (1682–1804 年)」山本達郎編『ベトナム中国関係史——曲氏の

- 抬頭から清仏戦争まで』山川出版社。[Suzuki Chûsei, 1975, “Rechô Kôki no Shin tonô Kankei (1682–1804)”, Yamamoto, Tatsurô (ed.), *Vietnam Chûgoku Kankeishi: Kyokushi no Taitô kara Shinhutsu Sensô made*, Yamakawa Shuppansya. (in Japanese)]
- 高橋孝助 (2006), 『飢饉と救済の社会史』青木書店。[Takahashi, Kôsuke, 2006, *Kikin to Kyûsai no Shakaishi*, Aoki Shoten. (in Japanese)]
- 武内房司 (1982), 「太平天国期の苗族反乱について——貴州東南部苗族地区を中心に」『史潮』, 新 12。[Takeuchi Husazi, 1982, “Taihei Tengokuki no Myaozoku Hanran ni tsuite: Kishû Tônanbu Myaozoku Chiku o Chûshin ni”, *Sichô*, Sin 12. (in Japanese)]
- 寺田浩明 (1997), 「権利と冤抑——清代聴訟世界の全体像」『法学』(東北大学) 61–5。[Terada, Hiroaki, 1997, “Kenri to Enyoku: Shindai Chôshô Sekai no Zentaizô”, *Hôgaku* (Tôhoku Daigaku), 61–5. (in Japanese)]
- 寺田浩明 (1983), 「田面田底慣行の法的性格」『東洋文化研究所紀要』第 93 冊。[Terada, Hiroaki, 1983, “Denmen Dentei Kankô no Hôteki Seikaku”, *Tôyô Bunka Kenkyûsho Kiyô*, no. 93, pp. 33–131. (in Japanese)]
- 東條哲郎 (2008), 「19 世紀後半マレー半島ペラにおける華人錫鉱業——労働者雇用方法の変化と失踪問題を中心に」『史学雑誌』, 第 117 編第 4 号。[Tôzû, Tetsurô, 2008, “19 Seiki Kôhan Malay Hantô Pera ni okeru Kazin Suzu Kôgyô: Rôdôsha Koyô Hôhō no Henka to Shissou Mondai o Chûshin ni”, *Shigaku Zasshi*, vol. 117, no. 4. (in Japanese)]
- 濱下武志 (1989), 『中国近代経済史研究』汲古書院。[Hamasita, Takesi, 1989, *Chûgoku Kindai Keizaishi Kenkyû*, Kyûko Shoin. (in Japanese)]
- 濱下武志 (1985), 「近代アジア貿易件における銀流通」『社会経済史学』第 51 巻第 1 号。[Hamasita, Takesi, 1985, “Kindai Azia Bôekiken ni okeru Gin Ryûtû”, *Shakai Keizaishi*, vol. 51, no. 1. (in Japanese)]
- 古田和子 (近刊), 「交易と決済, 市場と国家: 18~20 世紀初頭の上海」古田和子編『都市から学ぶアジア経済史』慶應義塾大学出版会。[Furuta, Kazuko, (forthcoming), *Toshi kara Manabu Azia Keizaishi*, Keiô Gizyuku Daigaku Shuppankai (in Japanese)]
- 古田和子 (2016), 「中国と日本の経済交流——後期倭寇から日清戦争まで (16–19 世紀)」土田哲夫編『近現代東アジアと日本——交流・相剋・共同体』中央大学出版部。[Furuta, Kazuko, 2016, “Chûgoku to Nihon no Keizai Kôryû: Kôki Wakô kara Nissinsensô made (16–19 Seiki)”, Tuchida, Akio (ed.), *Kingendai Higashi Azia to Nihon: Kôryû, Sôkoku, Kyôdôtai*, Chûô Daigaku Shuppanbu. (in Japanese)]
- 古田和子 (2013), 「序論 中国の市場と市場秩序」古田和子編著『中国の市場秩序』慶應義塾大学出版会。[Furuta, Kazuko, 2013, “Joron Chûgoku no Shijô to Chitsujo”, Furuta, Kazuko (ed.), *Chûgoku no Shijô Chitsujo*, Keiô Gizyuku Daigaku Shuppankai. (in Japanese)]
- 古田和子 (2013), 「近代中国における市場秩序と情報の非対称性——19 世紀末~20 世紀初頭」古田和子編著『中国の市場秩序』慶應義塾大学出版会。[Furuta, Kazuko, 2013, “Kindai Chûgoku ni okeru Shijô Chitsujo to Jôhō no Hitaishôsei: 19 Seikimatu–20 Seikishotô”, Furuta, Kazuko (ed.), *Chûgoku no Shijô Chitsujo*, Keiô Gizyuku Daigaku Shuppankai. (in Japanese)]
- 古田和子 (2008), 「中華帝国の経済と情報」水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』山川出版社。[Furuta, Kazuko, 2008, “Chûka Teikoku no Keizai to Jôhō”, Mizushima, Tsukasa (ed.), *Global History no Chôsen*, Yamakawa Shuppansha. (in Japanese)]
- 古田和子 (2004), 「中国における市場・仲介・情報」三浦徹・岸本美緒・関本照夫編『比較史のアジア——所有・契約・市場・公正』東京大学出版会。[Furuta, Kazuko, 2004, “Chûgoku ni okeru Shijô, Chûkai, Jôhō”, Miura, Tôru, Mio Kisimoto and Teruo Sekimoto, (eds.), *Hikakushi no Azia: Shoyû, Keiyaku, Shijô, Kôsei*, Tôkyô Daigaku Shuppankai. (in Japanese)]
- 古田和子 (2003), 「経済史における情報と制度——中国商人と情報」『社会経済史学』, 69 巻 4 号。[Furuta,

- Kazuko, 2003, “Keizaishi ni okeru Jôhō to Seido: Chûgoku Shônin to Jôhō”, *Shakai Keizaishigaku*, vol. 69, no. 4. (in Japanese)]
- 古田和子 (2000), 『上海ネットワークと近代東アジア』東京大学出版会。[Furuta, Kazuko, 2000, *Shanghai Network to Kindai Higashi Azia*, Tôkyô Daigaku Shuppankai. (in Japanese)]
- 古田和子 (1999), 「境域の経済秩序」『岩波講座世界歴史 23 アジアとヨーロッパ 1900年代-20年代』岩波書店。[Furuta, Kazuko, 1999, “Kyôiki no Keizai Chitsujo” *Iwanami Kôza Sekai Rekishi 23 Azia to Europe, 1900 Nendai-20 Nendai*, Iwanami Shoten. (in Japanese)]
- 彭浩 (2015), 『近世日清通商関係史』東京大学出版会。[Peng, Hao, 2015, *Kinsei Nisshin Tsushô Kankeishi*, Tôkyô Daigaku Shuppankai. (in Japanese)]
- 堀地明 (2011), 『明清食糧騷擾研究』汲古書院。[Horichi, Akira, 2011, *Minshin Syokuryô Sôjû Kenkyû*, Kyûko Shoin. (in Japanese)]
- 宮嶋博史 (1994), 「東アジア小農社会の形成」溝口雄三他編『アジアから考える [6] 長期社会変動』東京大学出版会。[Miyazima, Hiroshi, 1994, “Higashi Azia Shônô Shakai no Keisei”, Mizoguchi, Yûzô et al. (eds.), *Azia kara Kangaeru 6 Chôki Shakai Hendô*, Tôkyô Daigaku Shuppankai. (in Japanese)]
- 宮田道昭 (2012), 『上海歴史探訪——近代上海の交遊録と都市社会』東方書店, 第2章。[Miyata, Michiaki, 2012, *Shanghai Rekishi Tanpô: Kindai Shanghai no Kôyûroku to Toshi Shakai*, Tôhō Shoten. (in Japanese)]

要旨: 伝統中国は社会を崩壊させることなくなぜか膨大な人口を扶養しえたのか。本論では A) それほどのような経済であったのか, B) 周辺アジアにどのような影響を与えたのか, の二つの論点を提起した。両者は本来不可分の関係にあり, 問いに応えるためには中国を「中国史」ではなく「アジア経済史の枠組み」で検討することが不可欠であることを, 人口・食糧・小農経済, 山地の過開発と環境問題, 周辺地域への人口移動, 対外開放型経済と貨幣制度, 市場とそれを支える秩序などの検討を通じて示した。

キーワード: 中国経済, アジア経済史, 小農経済, 人口移動, 開発と環境